

# 福本和也

Kazuya Fukumoto

文庫書下ろし  
KOBUNSHA BUNKO

## 謎の「重墜落」

The Mystery of Flight 858  
長編ミステリー推理

消えた  
大韓航空  
858便





光文社文庫

文庫書下ろし・長編ドキュメント推理

謎の二重墜落―消えた大韓航空858便―

著者 ふくもと かず や  
福本和也

---

1989年9月20日 初版1刷発行

---

|     |       |
|-----|-------|
| 発行者 | 大坪昌夫  |
| 印刷  | 大日本印刷 |
| 製本  | 大日本製本 |

---

発行所 株式会社 光文社

〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13

電話 東京 03(942)2241(代表)

振替 東京 6-115347

---

© Kazuya Fukumoto 1989

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-701007-7 Printed in Japan

文庫書下ろし・長編ドキュメント推理

など  
謎の二重墜落  
消えた大韓航空858便

福本和也

—

光 文 社

この作品は光文社文庫のために書き下ろされました

## 目次

|     |                          |     |
|-----|--------------------------|-----|
| 第一章 | 南ア航空                     | 5   |
| 第二章 | 大韓機消滅                    | 23  |
| 第三章 | 858便の謎                   | 68  |
| 第四章 | 四つの顔                     | 111 |
| 第五章 | 現場なき航空事故                 | 146 |
| 第六章 | 深海に沈む謎                   | 195 |
| 第七章 | インセスト                    | 231 |
| 解説  | 結城信孝 <sup>ゆうき のぶたか</sup> | 255 |



## 第一章 南ア航空

### 1

十八日――

たが、滝雄介はけたたましい電話の音で目を醒ました。

打って、枕元の時計を見やった。

で原稿を書きおえてベッドにもぐりこんだのは六時ごろだから、五時  
ことになる。

く。

したよ

た。

「はい、滝ですが……」

「東都日報の平山だよ」

「ああ」

滝はいかつい顔の中年男を思い泛かべた。

「ついさっき外電の至急報が入った。南アフリカ航空のジャンボ機がインド洋のモーリシャスで墜落したらしい」

「南ア航空……」

滝にはいまひとつピンとこなかった。が、半ば習慣的に電話機とアダプターで接続されたテープレコーダーのスイッチをONにした。

「またきみの出番かもしれん。新宿の事務所で待機していてくれ。深見君の了承はとってある」

平山がまたと言ったのは、五年前に大韓航空機がサハリン（樺太）沖でソ連の防空軍の戦闘機に撃墜されたとき、東都日報の囑託として大活躍したからだ。

「とにかく、詳報をお願いします」

「二十八日午前四時（日本時間で午前九時）、台北から南アのヨハネスブルグに向かっていた南ア航空295便（乗員十九名、乗客百四十一人）が、途中、給油のため立ち寄る予定だったモーリシャスの近くでフライト・デッキ（操縦室）で火災発生とメーデー（音声による国際救



難信号」を発し、消息を絶った」

「なぜ外国機の事故でそんなにカリカリしているのです？」

「まあ、最後まで聞けよ。同機には、日本人乗客四十七名が乗っていた」

「何ですって!？」

もし事実だとしたら、日本人が海外で巻きこまれた最大の事故ということになる。平山は委細かまわずに先を続けた。

「乗客名簿によると、日本人乗客は水産関係N水産社の三十八名と、日本鯉<sup>かつおまぐろ</sup>鮪漁業協同組合連合会の二人を含む四十七名。現地警察は近辺に駐留するフランス軍の応援を得て空と海から行方不明機の捜索を続けているが、モーリシャス空港当局が確認したところでは、同日午前十時（日本時間）までに機体の一部と見られる破片を発見した。これで295便の遭難は確実になったが、乗員、乗客は全員絶望視されている」

「なぜN社が三十八名も?……」

「遠洋漁船の交替要員だよ」

「なるほど」

ソ連によって北方海域から締め出された日本のトロール漁船が、アフリカ沖やインド洋、あるいは南極海域に大挙移動して、操業を続けている事実は淹も知っていた。

乗員は約半年で交替することになっている。その場合の基地は、南アのケープタウンが多い。

今回の犠牲者たちも、ヨハネスブルグからケープタウンに移動する予定であった。

またモーリシャスとはマダガスカルの東約八百キロのインド洋上の島で、六八年三月に独立。人口は約百万人、首都ポートルイスは日本漁船の基地でもあり、南極観測船も毎年寄港している。最近は新婚カップルの旅行先としても知られており、リゾート地としての人気も高まっている。

「三十八名の漁船員は福岡から成田に飛び、キャセイ航空機で台北に着き、そこで南ア機に乗り換えたという」

なぜ成田でなく台北なのか？ これも説明がついた。南アの人種隔離政策が原因で南ア機の成田乗入れは禁止されているのである。

「たった今……」

と平山が早口で続けた。

「入電した外電によると、モーリシャス政府は、米空軍や第七艦隊、オーストラリア空軍にも搜索協力を依頼したらしい」

「カツオ・マグロ漁協とは？」

「我社の資料によると、北海道から沖縄までの十七漁協で構成されており、傘下の漁船は八百隻を超えるそうだ」

「日報さんのことだから、もう犠牲者の顔写真を集めにかかっているのでしょうか？」

「まあな」

「じゃあ、ぼくの出る幕はない」

「ひとつだけきみの意見を聞きたい。考えられる墜落の原因は？」

「テロ（破壊工作）でなければ、なんらかの理由で漏洩した燃料に、これまたなんらかの理由で引火したのじゃないかな」

「そのどっちなんだ？」

「ぼくは後者だと思いますがね」

「とにかく新宿の事務所で待機していてくれ」

「了解、どうせ今日は暇ですからね」

電話は平山のほうから切れた。

滝はダブルベッドの片方に視線を投げた。スカイブルーのネグリジェがきちんと折り畳まれて置いてある。

妻の由香里ゆかりの寝間着だった。

（めずらしく早く出かけたらしいな）

由香里とは二年前に結婚した。それまでの由香里は小さな出版社の正社員だったが、結婚を契機にいったん退社、現在は人材派遣会社のスタッフとして、同じ会社の編集部に勤めている。結婚前の由香里は髪を短くカットし、眸めもとが愛くるしくて、ぜんたいに清潔な感じのする

女性だった。髪型こそ変わっているが、その愛くるしさと清潔感はいまでも残っている。

一方の滝雄介は中堅のルポライターであった。フリーではない。新宿区番衆町のマンションの一室に事務所をかまえる『新宿出版企画』という会社に所属している。

私大の理工学部出身というこの世界ではめずらしい学歴で、専攻は航空宇宙工学。全国で唯一軽飛行機を持っている大学だった。どの大学でもグライダーは持っており、航空部は即グライダー部ということになる。滝の出身校もグライダーを持っており、そのため航空部は“グライダー班”と“軽飛行機班”とに分かれていた。滝は学生時代は軽飛行機班に所属し、きびしくきたえられて、自家用操縦士の免許を取得していた。そのおかげで航空関係者が口にする専門用語も理解できるし、航空関係の取材には欠かせない存在であった。

三十一歳、身長百七十三センチ、体重六十三キロという均整のとれた体軀の持ち主だった。滝は両足を床につけて立ち上がると、両手をひろげて大きく深呼吸をした。それから、軽く屈伸運動をして身体をほぐした。

手早く洗顔をすませ、由香里が用意してくれていたトーストと目玉焼きを牛乳で胃の腑に流しこむと、背広に着替え、コートを片手に持って渋谷区笹塚のマンションを出た。

私鉄と地下鉄を乗り継いで、番衆町の事務所に着いたのは、午後一時ごろであった。

最近、TV局ばかりではなく、大手出版社も合理化をはかり、正規社員の採用を極力抑えて、仕事を社外の出版プロダクションに委託する。

新宿出版企画もそんな群小プロのひとつだった。

社長は深見竜平りゅうへいといつて、元東都日報の記者であつた。妻と十歳になる娘と一緒にこのマンションの上の階に住んでいる。

文字どおりの職住同居であつた。

発足当初のスタッフは事務も入れて十名。それがいまでは十五名に増えている。その人数で企画、雑誌編集、週刊誌の特集記事などをこなしており、目のまわる忙しさだった。

滝雄介は、一応デスクというポストを与えられている。部下のライターたちが集めてきた取材原稿を最終記事にまとめるアンカーの役目を果たしているのだが、群小プロの悲しさで、自分自身が取材に飛びまわることのほうが多かった。

## 2

滝が事務所のドアを押したとき、社長の深見は窓を背にしたデスクに腰を下ろしていた。

「よう、ご苦労さん」

「墜ちた南ア航空機には、四十名以上の日本人が乗っていたそうですね」

深見は頷いて、

「一年の大半を世界の海ですごしている漁船乗組員が大半だそうだ。日報から乗客名簿がファ

ックスで送られてきた」

「ぼくも平山さんから一報を受けましたよ。漁船乗組員が三十八人、カツオ・マグロ組合の関係者が二人。他の七名はどういう人間ですか？」

「新婚のプロレスラー夫妻が混じっているらしい。他の五名はいまのところ身元がはっきりしないらしい。とにかく、きみに待機していてほしいそうだ」

「機体の残骸が発見されたというのだから墜落は確実でしょう。テロの可能性は？」

「捨てきれないそうだ」

滝は自席に腰掛けた。

「テロねえ？」

彼もテロの可能性を捨てきれないのだった。南アフリカという国の国情そのものもあるが、ボーイング747型機（通称ジャンボ）という機体に通曉しているからでもあった。

ボーイング747型機は、航空史上の数々の苦い事故を教訓に現在の航空技術の粋を尽くして製造された機体で、“世界でもっとも安全性の高い航空機”と折り紙をつけられてきた。INS（慣性航法装置）をはじめとする電子航法機器と、二重、三重の安全システムといわれるフェールセーフ構造を持ち、どこが故障してもハード的には惨事にいたることはないというのが、就航当時のセールス・ポイントであった。ジャンボ機の事故は過去十三回あるが、フライト・デッキ内の操縦士のミスが多いと考えられていた。

その神話が無惨に崩壊したのは、東京発大阪行きの日航一二三便が後部隔壁の修理ミスで操縦不能となり、群馬県の御巢鷹山おすたかやまに激突した事故以後であった。

航空機の事故には、インシデント（軽度）とアクシデント（重度）の二種類がある。ジャンボ機にも、インシデントは、これまでも数十回発生している。その一例を挙げると、北京発成田行きの日航ジャンボ機が大阪上空を飛行中、操縦室内のPMS（性能管理装置）付近から、白煙が発生、航空機関士が同装置の電源を切ったところ、数秒後に煙がおさまった実例がある。

壁ぎわに設置してあるファクシミリが音をたてて受信を知らせた。

「おいでなすったぞ。たぶん日報の平山からだ」

深見が立ち上がった。五十歳に近い年輩で、頭髮が薄く、背が低い。下腹が出っ張っており、ズボンがいまにもずり落ちそうだった。

そんな外見からは想像もつかぬほど、仕事にはタフで切れる男だった。政治ネタが得意で、いまでもほとんど毎号のようにあちこちの総合雑誌に署名入りの文章を発表している。

ライターには硬派と軟派とがあるが、滝は深見の影響を受けて、どちらかといえば硬派的な分野が得意であった。

二人は壁ぎわに歩み寄った。ファックスがロール・ペーパーを吐き出している。  
 “識者の意見”という見出しが目にとびこんできた。

「さすが日報だな、やるのが早い」

深見が紙をちぎって目を通してから、滝に手渡した。

滝も目を落とした。

### 航空評論家、A氏の話

『いまの段階ではあまりにも情報が少ないので何とも言えない。テレビの報道だと、南ア機は胴体の前半部が客室で、後半部は貨物室とのこと。仮に操縦室が出火場所だとしても、技術革新で航空機の防火装置が格段に進歩しているので、オーバーヒートなどで電気系統から火が出た場合でも、ボヤ程度ですみ、大きな事故にはならない。今度のケースだと原因として考えられるのは、電気系統の故障かテロですね。特に南アは政情不安ですしね』

### 航空評論家B氏の話

『これまでの情報から推して、操縦室内で火災が起きた可能性が強い。操縦室には計器盤やセンサー・ペデスタル（中央機器操作盤）、オーバーヘッド・パネル（頭上スイッチ類操作盤）など、火災を起こしやすい機器がたくさんある。それらが過電流や絶縁不良など、何らかの原因で火災が発生したのではないか。しかし、通常の場合は、パイロットがそなえつけの消火器で消火し、大事故を防ぐことができる。機長が「緊急降下する」と言ったとの報道もあるが、



仮にそのとおりなら、誤って機体を海にぶつけたことも考えられる』

### 航空評論家C氏の話

『ジェット機の火災は、ほとんど客室内の火の不始末とかエンジン周辺部の過熱によることが多い。操縦室内の煙が原因となって墜落したとすれば、初めてのケースではないか。タバコの火の不始末ぐらいで火災が起きることはあり得ない。突然、交信が途絶えたのであれば、機内でよほどの大異変が生じたのであろう。原因は今後の調査に待たれるが、現段階では时限装置による爆発の線も否定できない』

自席にもどると、滝は横山陽子よこやまようこという女の子に声をかけた。

「陽子ちゃん、南ア航空のデータをプリントアウトしてくれないか」

「はい」

二十歳前後はたちであどけない感じのこの娘は、パソコンとワープロのオペレーターとして人材派遣会社から派遣されているのだった。

手に技術を持つ女性のお高さがなく、雑用にも気さくに動きまわるので、みんなに好かれていた。

陽子は端末機の前にすわって幾つかのキーを叩いた。プリンターがA4判の紙を吐き出した。